

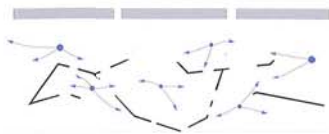


歩道のスミカ

東京以外の各都市は、都市構造において縮小と空洞化によるまだら状態が進行している。経済成長期の都市発展の理論が通用しない。そこで今回は都市における人的ネットワークの力を利用して、先進的なコミュニケーションを主体とした建築空間を提案する。計画地である名古屋の歩道はとても幅広く、殺風景な空間がひろがっており、その特徴を活かしていない。ここに多様なsceneを作り出す。会議室・オフィスなどを小さな単位に分解し、3次元的な広がりがある空間単位【セル】として扱う。その単位が集合集積することで建築を成立させ様々な空間性・機能性を獲得していく。家具・建築・都市スケールを合わせ持つストリート建築。歩道より名古屋にざわいを始める。



□運動行為を伴う新たな建築型



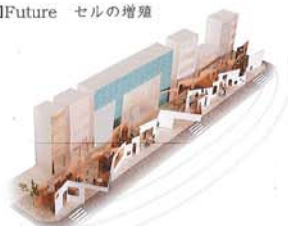
幅10mの歩道に、層状に壁をゆらめかせる事により様々な空間・動線が作られる。壁に付随するセルを繋ぐ経路空間(歩道)は身体スケールに近づき半屋内的な空間となる。常に流動的な時間を執る歩道空間では、新たな交流が生まれる。

□歩道における刺激(情報)量の増大



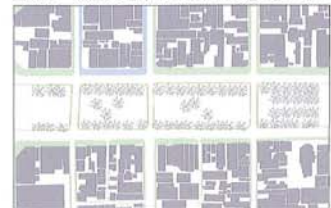
セルは多用途に利用される。多様に使われるセル及びそれを繋ぐ経路空間が歩道全体を内包している人・人・モノ・人と情報を結び付ける。このような外部的な刺激や自らの運動を伴う行為が触媒となり、顔の動きを活発化させていく。

□Future セルの増殖



将来の需要は減り、車道が狭くなるかと予想される。今回は一街区を敷地としたが将来南北方向へ足を伸ばし、久屋公園方面へlayerを増やし、100m道路と守られた趣きの場は一体として身体スケールに合った活気ある広場となる。

□Site 久屋大通り沿いの幅10M歩道1街区



敷地は久屋公園敷北街区より3番目の1街区に設定する。cafe,fashion shop, 化粧品会社などが軒を連ねている一方、その多様性を活かされていない。目の前の道路の奥に存在する長々と続く久屋公園はいつでも人影が少ない。

□既存建築のセル化



壁は歩道をゆらめかせるながら既存建築に応じて貫通をする。閉鎖的になりがちな建築のハコモノに直接働きかけ、既存建築をまるごとセルの一種のように扱う。街と既存建築との新たな関係性を築く。



□三次元的空間の広がり



面的に広がる歩道空間に対しセルを三次元的に展開させていく。あらゆる場面に木の葉が育つかのように、この歩道には多様なアクティビティが具体的に展開されている都市全体が活気に溢れていく。



様々な活動がみちみちここで繰り返される。



□インフラの内包



既存のバス停では、せり出した壁に付随するセルが乗降者の庇に、そしてその奥に広がる空間は待合室などとして利用される。このようにインフラの内包する事により、空間に厚みをもたらす。



□layerをまたぐ階段



階段が層をまたぐことにより、行動に弾力性を持たせる。歩道が単なる歩行空間になるのではなく、まるでジャングルの中で何かを求め、さまようかのように進むながら行動・選択していく。



歩道におけるアクティビティの拡大。あらゆる情報がちりばめられる。